



## 手織工房 おおしろ



染め・織り・洗濯までの一貫した工程をこなしている工房。若い職人達が注文に応じて手作業で多彩な製品を生産しています。

敷地内に、糸干し場、洗濯場が配置され、適度な光と風が吹き抜ける工房です。



## 盛んな 伝統芸能



字照屋には、舞方棒をはじめ様々な伝統芸能が根強く残っています。照屋農村コミュニティーセンターの近くには、照屋の伝統芸能がたくさんデザインされた自動販売機が設置されています。



## 水タンクのある民家



1950年代に建てられた戦後文化を忠実に伝えている民家。県民文化遺産にしたいほど貴重な建築物。セメント瓦屋根にかかる樋は、老朽化したため、プラスティック製に取りかえられたが、家屋も水タンクも建築当時のままでです。



## 夜警団 跡屋



こちらは1950年代に建てられた防犯上の小屋の跡。字照屋は交通の便に優れていて、泥棒や不審者も多く、夜間の警備をするために、若者が集まる場所として建てられたそう。現在も跡地の花壇は、地域住民の「美ら花会」の皆様によって綺麗に整備されています。

作成:南風原平和ガイドの会（2011年）

発行・改訂:一般社団法人南風原町観光協会（2020年）

住所:〒901-1112 沖縄県島尻郡南風原町字本部158

電話:098-851-7273 FAX:098-851-7109

メール: chiiki-machidukuri@haebaru-kankou.jp

根強く伝統芸能が継承される

南風原町の



# 照屋を歩く



一般社団法人 南風原町観光協会



むかしむかし、琉球の戦国時代にノロシ(狼煙)台や見張り台として使用されていたと思われるのがデームイです。

小高い丘の頂上にはシーサーとウタキがあり、今でも信仰の場所として人々が訪れています。

シーサーはデームイ毛の北西側にありました。学校の建設のため現在地に移されました。東のシーサーより、こぶりで穏やかな顔をしています。【町有形民俗文化財】

### 1 デームイ毛 モー<sup>モー</sup> とシーサー



### 3 照屋ノ口殿内 テルヤヌンドウヌチ

照屋を守護している神々が祀られている清涼な所。昭和55年木造からコンクリート造りに改築しました

### 6 イシジャーガー

集落の斜面に人家が増え、大正時代の旱魃時に石ころばかりの原に井戸を掘り飲料水を確保しましたが、近年のアパート建設時に埋められました。井戸の跡にはウコール(香炉)を置き水神への感謝を捧げています。



# 戦前の照屋の地図

「60年前の南風原」南風原町史編集委員会  
1994年（平成6年）発行



### 5 ユンヌカー

照屋には井戸が少なく、その中でユンヌカーは水量が豊富で、正月の若水はここから汲まれました。



### 7 イシジャースシー

安平田子が首里王府に攻められ傷つき、この場所まで逃げてきたが逃げ切れずに岩と岩の間で息絶えたと言われています。この場所を津嘉山集落ではチマダヌシー、照屋集落ではイシジャースシーと呼んでおり、現在も子孫がお祀りをしています。



シーサーは、ムラの入口にフーチゲーシ(邪気返し)の目的で設置されています。

となりの字本部が火の山と恐れられていた八重瀬岳へ向けてシーサーを設置し、それが結果的に照屋に向く形になり、照屋集落は対抗して本部に向けて置いたと言われています。

【町有形民俗文化財】



### 4 ナガ毛<sup>モー</sup> モー<sup>モー</sup> とウタキ そして サーターヤー跡



三体の神様が仲良く祀られ、ナガ毛を見守っています。下の広場には昔サーターヤー(製糖工場)が門中ごとに建ち並んで黒砂糖の生産に励んでいました。サーターヤー跡碑の下には「力石」が埋まっています。

### 8 トウンヌシチャ

公民館の裏にあるトウンヌシチャ(殿の下)は、首里王府に亡ぼされた安平田子の次女真呂勢が、浦添から仲間大主を婿養子に迎えて、結婚後に住んでいた住居跡です。



照屋の今昔

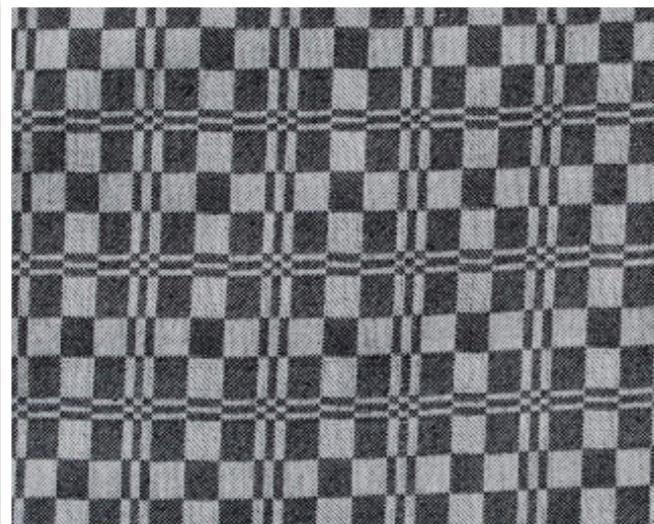
照屋集落はデームイ毛の南斜面に展開しており、この一帯は、ヌンドゥヌチや旧家等があり、集落の草分けにかかる古い集落である。集落前方の現在の公民館の敷地は、ナガ毛<sup>ナガモ</sup>と呼ばれ、かつてはアシビナーでもあり、綱引きや芸能や相撲をしたり、若者たちが力石で力比べ等をした所である。

また、各組の製糖工場もあつた。

主な産業は、農産物であるが、副業として琉球絣<sup>りゅうきゅうくさり</sup>（照屋<sup>てるや</sup>八枚<sup>はしまい</sup>も考案された）の生産をしており、過去においては布団の打ち直しや、生産も行われていた。

# 南風原花織

かすりのように、経緯が一本ずつ交互に織り合わせられる織物を平織といいますが、2本、3本と糸を浮かして変化をつけた織物を組織織もしくは紋織といいます。沖縄ではそれを「花織」といい、南風原花織は多様な色彩の花糸を使った立体感のある浮き柄が魅力的で、高い人気を得ています。



南風原花織には、ヤシラミ花織、  
クワアンクワアン織り、タッチリー  
など、産地にしか存在しない名称  
がありその模様は花のように美しく

南風原町では、明治のころから花織の技法を母から娘へと伝承させてきました。先代から伝わる花織の技術とあいまって、独自の花織・浮織の技法を確立し、「照屋八枚」、「喜屋武八枚」という独自の技法も確立させ、多様な織りの技法が今日まで作られております。

2017年には、浮き出た柄の美しさや多様な織りの技法が特徴の南風原町特産「南風原花織」として、国の伝統的工芸品(伝産品)に指定され、1983年に指定された「琉球絣」に続き、町の織り文化の豊かさが示されました。



琉球かすり

南風原町が誇る上等品と言えば、何と言っても琉球王府時代から伝わる「琉球かすり」です。

各自によって行事や習慣は違うもので、絣の制作は、昔は分業制で各工程をそれぞれの字で行っていました。現在では数か所の工房があり、すべての工程をひとつの中でもこなしているところがほとんどです。ここ、南風原町宇照屋も農業と織物業を主な産業としていました。その絣の制作工程を見て回れるよう、「かすりの道」が整備されました。かすりの道とは、足元の石畳に琉球絣の模様が施されている道の事で、一周すると約2kmになります。

